來ることである。いま支那思想上重要なものの一つである「天」の祭を例に取らう。天の祭は帝の祭及ひ禘の祭と關聯してをり、帝とは本來始祖又は遠祖を現す言葉で、この帝が天上に在るとする思想から、祖先崇拜が天神崇拜となり、後には抽象的な天を祭る圜丘祀天にまで發展したことを見逃すことは出來ぬ。これについては小島教授の「分野說と古代支那人の信仰」（東方學報京都第六冊九—十五頁）參照。又「天」に對する「地」の祭を見よう。諸橋博士も第五節地祇祭に於て方澤祭地と社稷祭とを述べてをられるが、この社の祭も、よく究めるならば、氏族社會の集團の神であることは想像出來る。この氏族社會の神が領土の神となり、農業との關係から社稷神となり、後には抽象的な地を祭る方澤祭地に進展したのである。この天地の祭のみよりしても、經學的立場から一歩踏み出るならば、相當面白い家族制度研究に對する示唆が與へられるにも拘らず、この書物では、天地の祭が家族制度とは關係が甚だ稀薄になつてゐる。して見れば經學的方法は必然史學や社會學等によつて根據が與へられる場合にのみ可能となることが分らう。博士は家族制度研究の大家であり、雜婚とか亂婚とか（二—四頁）、賣買婚（七頁三七頁）とか、タブー（三頁三三五頁）とかによつて色々の解說を與へてをられるところから見ると、社會學等にも御造詣が深いらしいから、次には「立說」を主とした著述によつて又々吾人を啓蒙して戴きたい。その場合私として知りたい事は、一、庶民の家族構成員の餘り大きくないのは何故か。從つて、二、宗族的結合を目的としての宗法が庶民の間にも存したとしても（四三四頁）、何故に鰥寡孤獨の問題が相當やかましく言はれたか。三、奴婢は、所有者の側から見れば家庭へ他人を入れることであり、奴婢自身に於ては家族の分散を意味するが、如何やうに發生し、如何やうに取扱はれたか。四、宗法と均分相續とは如何にして兩立しうるや。等々である。

何も分らぬ人間は、敎へられて少しでも知識を持つと、何でも慾張つて尋ねたがる者である。私の場合でも同樣。

（西田太一郎）

支那精神（世界精神史講座二）

世界歷史空前の轉換期に際して、東西兩洋に亘る過去竝びに現代の思潮を省みて將來の人間精神の歸趨を考へることは吾等に取つて喫緊の時務と云ふべきである。時に東亞新秩序建設の一翼として新しき東洋文化の創造が吾等に委ねられてゐる時、その媒介となるべき過去のアジアに於ける輝かしき文運を跡ねることは何よりも急がれねばならぬ。本冊は既刊の「日本精神」「印度精神」と共にこの要望に添ほんとして企畫し出版されたもので、執筆者九氏、何れも學界一方の重鎭で居られる。私の淺學を以てしては批評紹介に堪へないと思ふが、この書が廣く讀まれる爲にも、その價値の一班を傳へかつ若干の感想を述べさせて戴きたいと思ふ。なほ紙數の都合上、本意なくも內容の紹介は一部分に止めねばならなかつた。

儒敎概說

諸橋轍次

一　儒敎の領域　二　儒敎の成立及發達　三　儒敎の道德

（頁數四九）

老莊思想

武内　義雄

一　叙說　二　老子　三　老子の後學　四　稷下の道家　五　莊子　六　老莊と易　七　魏晋六朝の老莊學　八　老莊と佛教　（頁數三一）

支那文藝思想

竹田　復

一　文藝の意義　二　儒家の文學觀　三　道家の文學觀　四　結論　（頁數三七）

「文」といふ語には模樣・文字・文章・學藝等の意味があるが言語の美化された文飾の意味をも有し、遂に文學に於ける形式主義修辭偏重の風を來した。漢民族は環境の豐かならざりし爲、生活態度は積極的實際的になり、儒家思想が生じ、その文學觀は感情を排し理想的なものを尙ぶ。儒教の道德的文學觀は漢代に於て甚しく古代の素朴なる文學詩や楚辭を曲解した。後漢末の徐幹をへて魏の文帝に至り漸く道德の束縛を脫し藝術の意義が發見され、陸機は文學の理（內容）と文（形式）の渾然一體を說いたが、南北朝に入り支那人自體の傾向と佛教の影響による音韻學の發達が文學を形式に傾かしめ思想內容を空疏にし、繪畫的音樂的表現に効果ある四六駢儷文が發達し、文學は道德を離れて自由な道を步んだ。

韓愈の古文辭運動の影響は宋代の理學詩に及び、技巧を無視し深い寓意を含ませる風を生じ遂に白話詩を生んだ。明代に及び儒學の惡影響が俗臭紛々たる八股時文を生じ、一般に經世文學が貴ばれ文學の正統的發展を阻害した。儒教の小說觀は漢書藝文志に見える如く、君子から蔑まれた。近世口語小說は講釋師の口演筆記に發し娛樂として大衆の間に喜ばれ科學落第の文人が筆を染め牢騷の氣をはらした。「水滸傳」で〻盜を教へ金瓶梅で〻淫を誨ふ」といふ禮教觀念と苟合妥協して勸善懲惡主義が唱へられ小說は苦しい自己辯解をし乍ら、漸くプロットの興味を覗つた紅樓夢・儒林外史・浮生六記の傑作を生んだ。戲曲は小說と違ひ韻文を主に用ひ、且つその曲が藝術的に優れてゐた爲、小說程知識人の蔑視に遇はず、詩文程道德の制約を受けず、先づ無難な發達を遂げた。

道家の文學觀は（イ）大巧は拙なるが如し。（卽ち無我の境に入るを理想とし技巧を排する）（ロ）人生は朝露の如し。（快樂的刹那主義と不老不死への欲求）（ハ）自然に還れ。（陶淵明の拙と放、寒山の風韻、馬致遠の詩境）（ニ）人間解放（卽ち紅樓夢・儒林外史に見える傳統的禮教、因襲的社會への反抗）等の方面に著れる。

支那文學思想はこの二大潮流に分たれる。儒家は溫柔敦厚の文學を貴び、道家は天眞の美、平易な表現、一種のヒューマニズム、（但し自然と對立せずこれと一に融合せる人間の究明）に傾く、秦漢隋唐は前者、魏晋五代宋元は後者の思潮がさかえ、先秦では兩者派れず、淸朝では兩者を批判的に包攝してゐる。

氏の立場は儒道二思潮の文藝觀の對立に於て支那文藝思想を歷史的に把握せんとしたもので、中に鋭き見解を含んでゐる點貴ぶべきである。然し後漢の「人生朝露の如し」といふ詩人の厭世思想・刹那主義を道家思想に從屬せられた如き如何であらう。死は生の運命であり、思想以前の人生の原本的事實である。詩人は生から直接に死の不安を歌ひ既成の思想の媒介を借りな

ら汲み取らねばならぬ、後漢の老莊思想と厭世詩との關聯はこの場合第二次的な文化史上の問題であらう。この疑問をおしなべて氏が儒道二家の思想を通じて文藝思想の變遷を眺められたことは何か間接的な方法ではないかと私考する。

支那佛教

塚本善隆

序說　一　佛教の傳來とその宗教的受容（道教的佛教の展開）　二　佛教の哲學的受容（貴族的情談佛教の展開）　三　空觀佛教の展開　四　大小乘經の受容と會通　五　法華經（天台宗）の展開　六　北地の華嚴學と華嚴宗の展開

（頁數五五）

支那佛教とは印度西域の佛教諸派が支那に傳へられ漢譯經典を通じて支那人の思惟と生活の中に受容せられ、內は相互に、外は古典文化と反撥協調し乍ら選擇綜合され教理を組織し行證を體驗して成立した佛教、簡言すれば支那人の佛教である。佛教は先づ神仙方術の信仰盛んなりし漢末社會に傳來し、三世因果應報の教義により支那人に最大の感化を與へ、釋迦の神仙的性格を以て教化した。支那知識人は神仙道術を排斥したが本來これと對立せる哲學的教義を有した佛教は釋迦の聖人的性格（特に道家の聖人）を以て知識人に接近した。こゝに神仙的道教的性格を止揚して聖人的道家的佛教が門閥貴族の間で成立したが、彼等の非實踐的態度は格義佛教に停らしめ、眞摯なる沙門は譯經の發達と自身の探求とにより格義を止揚した空觀佛教を成立せしめ、吉藏の三論宗まで到達した。吉藏は晩年法華經な經宗が弘通するといふ事實を指示してゐる。

無秩序に傳來し飜譯された諸經間の矛盾を解決すべく教相判釋が行はれ「小乘を止揚した高き段階への發展としての大乘」が起り、法華・華嚴の精華となつた。般若維摩と並び支那で盛行した法華經の研究は智顗の天台宗となり、その教判は行證に卽した教相、卽ち教觀雙運を主眼として宗教的實踐性を發揮せんとしたものである。北支では涅槃華嚴の積極的妙有常住の教義が迎へられ般若三論が龍樹系なるに對し、世親教學を承けたもので支那佛教の二大潮流である。法藏は華嚴宗を大成し五教十宗の教判、事々無礙法界觀を唱へ支那佛教々理の發達はこゝに極まつた。一方、信行證の體驗に基く禪・三階・淨土の諸宗はある意味で教判佛教を止揚し、後者が「印度の釋迦牟尼の弟子の佛教」を極めんとせる傾向强きに反し「支那の自己と社會の成佛する教」たるべきことを反省したもので、眞の支那佛教の完成と云ひ得、禪淨二宗は今なほ生きてゐる。

氏の立場は現今最も進步した支那佛教史であると云はれよう。こゝに提示された支那佛教の五つの發展段階——道教的佛教——道家的佛教——空觀佛教——教判佛教——禪淨二宗——は劃期的な意味を持つ。思ふに氏は各段階に於て外來師承の教義とそれに接した沙門を含めての支那人の思想的雰圍氣との間に起る矛盾が沙門の宗教的實踐によつて次の段階へ止揚されると考へられて居る樣である。たゞ最初の神仙的佛教から道家的佛教へ止揚が成されたと第二章で述べられてゐるのは、これは第一章で觸れてをられる如く、支那社會が截然と士庶の二階級

に分れてゐるため同一の思想內容のまゝ佛教が兩方面に對し傳播し難いので遂に宗教的傾向と哲學的傾向との二方面に分裂したもの、換言すれば縦の發展ではなく横の分裂であらうと考へたいのである。

宋　學　　後藤　俊瑞

一　宋學史概觀　二　宋學の哲學的精神　三　宋學の道德精神　四　我國に於ける宋學（頁數三九）

支那の政治思想　　手塚　良造

一　上代の政治思想（典謨禹貢の統一思想）　二　近代の政治思想（大同說）　三　原理論　四　形式並に政策論　五　餘論（頁數四三）

支那の經濟社會思想　　森谷　克己

はしがき　一　孔老以前　二　老子の牧歌的小國寡民の理想　三　孔子の民食、社會および國家思想　四　墨子の父家長的權威の否認と勤儉主義　五　老子後學の社會無視と孟荀二子。（頁數三九）

支那の民族信仰　　永持　德一

一　天と錢　二　天と民俗信仰　三　家廟家祭及び灶王爺祭　四　魂不死と五福臨門　五　門神、石敢當、爆竹、六　信仰象徵としての動植物　七　結語と參考文獻（頁數二五）

二十年近く支那民人の間に生活し最も親まれた音聲は天と錢との二つであつた。天は支那人の精神生活を、錢は實際生活を支配し、彼等の一手托天、自ら助くる外なき生活本位の態度が遂に今日傳る民俗信仰となつた。

皇天后土・陰陽・山嶽・土地神・宗廟等が天から說明され、家廟は一家の天で、同居同（異）爨の問題が錢に關してくる。ついで開弔・伴宿・燒活の儀式、魂魄の思想から五福（福祿壽喜財）や門神・五毒・紅布の習俗、最後に信仰象徵としての動植物——龜・虎・蝙蝠・蓮・柘榴・棗・茉莉花（ジヤスミン）梔子花——について說述される。

氏が豐富な體驗とそこから得られた印象を把持しつゝ文獻に就いて考察されたことは何よりの强味といふべきであるが、冒頭に揭げられた天・錢の二語を支那人の觀念的及び現實的方面の原理として他の一切の民俗信仰を演繹される過程には多分に聯想的・便宜的なものがあり、素材とその論理づけの間に空隙が生じ、又、また外來宗教や周邊異民族の影響による民俗の階層性を說明せられる點が乏しいと思ふ。

現代支那思想　　小竹　文夫

序言　一　民國成立前の思想—傳統的思想の動搖　二　民國初期の思想思想—革命の興起　三　國民政府時代の思想—三民主義思想より抗日救國思想へ—（頁數四一）

舊支那は鴉片戰爭・日清戰爭・民國成立を各契機として新支那卽ち現代支那に移つたが、民國成立以前は舊思想——卽ち政治上の德治主義、經濟上の知足平等主義、社會上の家族主義、教育上の倫理主義、總じて古典の眞意に生きる國家宗教として

の儒教の動搖期で思想史上の過渡期といふべきである。鴉片戰爭は單に對外種族感情、西洋軍制の採用による富國强兵思想を支那人に植ゑつけたのに反し日淸戰爭は傳統文化への反省を起させ、康有爲は西洋の富强は軍事のみでなく窮理勸學なりと唱へ、西洋學を科擧に入れんと乞ひ戊戌新政となつた。義和團事件の結果、保守派退き張之洞、劉坤一の「變法會草」が著されたが、內容の急激なるに比し自覺が足らず、革命思想代り興つた。民國初年の思想的混迷時代を破り陳獨秀・胡適の思想革命（新文化運動が）起り、陳獨秀・吳虞・李大釗の唯物史觀の立場からする儒教排斥となり、胡適の文學革命、八不主義・四標語の提唱となり、彼等の具體的思想は政治的に民主主義、社會的に個人主義、教育的に科學主義 ――デモクラシーとサイエンスであつた。しかし胡適の說く英米實驗主義の科學は一般に歡迎をうけ、陳獨秀は一部靑年に信奉され實際運動に走り中國共產黨を結成した。（民國九年）私學的方法による傳統文化の檢討整理が盛んになると共に、東洋獨特の文明を尊重する辜鴻銘・梁漱溟の思想も一部で受け入れられ、西洋か東洋か、人生觀か科學かの論戰が、張君勵・丁文江の間に戰はされ、陳・胡及び吳稚暉らも參加した。この間、政府の實權は進步的思想に殆んど理解なき軍閥により握られてゐたが、新しい思想に乘じ社會改造を實行せんとして中國國民黨と中國共產黨が現れ、民國十三年、前者は聯俄容共を唱へ後者を合流せしめた。三民主義も中國同盟會時代の滅滿興漢・共和政治樹立・土地國有論から政黨國民黨時代の五族共和・憲法議會（民主主義削除）をへて中國國民黨時代になり完成した。それは終に共產主義と相容れず、南京政府と武漢政府との對立となり、容共を撤回した三民主義は全國に傳播し共產黨は地下に潛行した。

西安事變を契機として兩者は抗日救國主義に合體した。三民主義の原理的弱點は民族主義に於ける自主性の强調となり、傳統文化の昂揚 ――新生活運動ともなり、又支那社會の科學的認識の欲求となり社會經濟史研究が勃興したが、こゝでは左翼思想が壓倒的であつた。國民黨の抗日は終には民衆に引きづられ支那事變後專ら無內容低級なる感情にすぎない抗日思想で固められたが、新たにこれに對する反省が純正三民主義となつて現れた。しかして日支を結ぶべき思想根據として日本で東亞協同體論又は東亞聯盟論が唱へられてゐる。東亞協同體の根基には地緣的・血緣的以外に新しく樹立さるべき東洋文化がなければならぬ。それは今日悉く日本に保持されてゐるが、これを發生せしめた民族は矢張これを理解し共鳴を感ずるであらう。こゝに過去の東洋の文化の反省の上に築かるべき東亞共同文化の根基がある。

氏の所說は明晰であり、現代支那思想の潮流が政治的國際的情勢との關聯に於て把握せられてゐる。最後の所論である東洋文化の創造について、今後具體的に論證を展開され歷史的に論旨を基礎づけられんことを切望する次第である。（宮川尙志）

東京理想社版　菊判　三五三頁　昭和十五年五月　（價二・三〇）